

言語という小宇宙 — 詩人E.E.カミングズの創造的企投 —

門脇 道雄

世界があるという一事が神秘である。E. E. カミングズ Edward Estlin Cummings (1894—1962) による統語法 (syntax) は、未知なる世界を構築する。句や節のまとまりあるいはまとまりのなさ、語と語の思いもかけぬ連結や乖離を導きだし、語と語の連続性ないしは非連続性が見知らぬ統語法を行使するにいたる。たとえば、S (主語) + V (述語動詞) + O (目的語) という規則性を内包するふたつの文 John likes Mary. Mary likes John. は、互いに異なる意味を持つことを読み手は知っている。主語・述語動詞・目的語のありかは語順 (word order) によって伝えられる文法のうちにあるが、主語・目的語・補語それに述語動詞の存在を突きとめることが難しい作品もまた存在する。カミングズの詩篇には語順という制約が取り払われてあるものが多いゆえ、日本語とは異なり助詞が存在しない英語にあっては統語すべき語群を見極めることは困難である。文法規則が既成のものではないのであれば、あるいは規則性が新たに形成されているのだとすれば、既成の文法概念を抱いている読み手は路頭に迷う。それでもなお読み解こうとする営為は読み手を未踏の領域へと連れて行くだろう。語と語の連結の曖昧さは、述語動詞のとりわけ他動詞と目される語の目的語を見失わせ、自動詞であるかもしれない余地を残しつつけながら、述語動詞それ自体として成立する可能性を薄めていく。したがって、詩篇の内存在する規則性は読み手の気分に作用されるものとなり、確定される意味は存在しないように思われる。こうして、視覚詩 (visual poetry) においては、意味からの解放が志向される意味論 (semantics) が巧まずして意図されているにちがいない。世界がいまここにこうしてあることそれ自体がつねに意味を超えているように、形象詩 (shape poetry) は超えた意味の彼方に新たな意味を生成している。

6

n w
O
h
S
LoW
h
myGODye
s s

(from *Late Poems* III)

最後の2行は台座のように見え、上の6行が仏像にも見えてくる。受け留め手の視覚における主観的な把握は、自由な世界を構築する。時間が経過すれば、見える像は微妙にあるいはまったく違っているにちがいない。私たちの実在がつねにいまここにあるものから変容するように、世界もまたつねに変容を遂げている。各行がセンタリングされており、中央を軸として左右対称にあるこの像は、しかしながら、アルファベットで構成されている。小文字の群と大文字の群は、それぞれ左右対称に位置している。

何ゆえに絵の具や物体ではなく文字で構成されているのかという問いが湧き起こるのは、この文字の連鎖に統語法らしきものが働いているのかどうかという疑問ゆえにである。文 (sentence) の構文化はもとより、節 (clause) や句 (phrase) の構成が不明である。そして、それより細かな単位である語 (word) の所在すら明瞭とは言い難い。分断される語のありようと、通常の文法における大文字化 (capitalization) には当てはまらない大文字の出現は、意味論を遠く彼方へと放り投げる。

きっちりと相称に据えられた語群からは、しかしながら、いろいろな語が視えてくる。アルファベットは、前から後へ、後ろから前へ、斜め前から斜め後ろへ、斜め後ろから斜め前へ、と繋がりをうる。そうして見て取れるのは、次の

ような語である no, now, show, how, oh, slow, low, my, god, dye, so, yes。
no が yes へ、yes が no へと回帰するような世界にあって、隠れたキーワードは snow（雪）であるように思われる。GOD を除けば、これが唯一の内容語でもあるからだ。詩集 *95 Poems* の作品41などがそうであるように、snow（雪）のなかに now（現在）が内包されている⁽¹⁾。

台座の中央に嵌めこまれたGOD（神）は、大文字であり分断されていないただひとつの内容語（content word）であるゆえに、ひときわ目に眩しい。「神」は、しかしながら、Oh my GOD のうちに統語されており、「いやはや／おやまあ」という困惑・驚きのうちに捉えられているとも考えられる。この内在する意味の二重性は、台座における yes の肯定が冒頭 2 行における no の否定へと連関するありようにも認められる。また、順接的な意味の二重性では、中央の 4・5 行目に位置する S/Low に現れる Slow と Low というふたつの語に内在している。それらはともにカミングズの詩群を基調する stillness（静寂）へと通じており、熟成する内省の世界が予感される。降雪の停止するありようがありえないように、停止する今もまたない。世界は降る雪の空間にあると同時に、つねに次へと移行する今という時間のうちにある。

次の詩篇に現れる世界もまた、相称（symmetry）のうちに現れる。

7

b
et
wee
n no
w dis
appear
ing mou
ntains a
re drifti
ng christi

an how swee
tliest bell
s and we'l
l be you'
ll be i'
ll be ?
? ther
efore
let'
s k
is
s

(from *Late Poems* Ⅲ)

原文も、またこの原稿も、それぞれの小文字の幅のサイズが異なるゆえに、正確な山なりとはなりえていないが、実は、この詩篇の各行の字数は空きマス・疑問符及びアポストロフィーを加えれば、1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・11・10・9・8・7・6・5・4・3・2・1字というように、連続して増減する均衡のうちにある。均整美への志向が、この詩篇を統括する統語法である。

通常の繋がりへと語を連結し直すならば、次のような構成が想定されうる。

between now disappearing mountains are drifting christian how sweetliest
bells and we'll be you'll be i'll be ? ? therefore let's kiss

しかしながら、これらの語の連結は、主語及び述語動詞のありかを浮き彫りにすることはない。主語と目される名詞あるいは名詞句は (disappearing) mountains と we, you, i のみであり、mountains (山々) が disappear (消える) し、あるいは drift (漂う) するとしても、それらが表わしうる意味はいかなることであるかが、限られたこの文脈 (context) では把握しがたいからだ。

しかも、述語動詞であるべきbe 動詞は次に従えるべき語群を欠いてしまっている。

とはいえ、このような文脈にあってさえ明瞭に伝わってくる一文がある
let's kiss。christian が church (教会) へと連想され、詩篇は結婚式の現場へと読み手を導く。不動なるもの、すなわち山々は消えつつ浮動し、鐘(bells)がこのうえないやさしさで(sweetliest) 鳴るように、二人は栄えある前途を祝福されている。今という時間のなかに、わたしたち、あなたたち、そしてわたしが生きている。それは、実在なのかという問いが、疑問符(?)で表明されている。甘美さ(sweetness)も敬虔さ(christianity)も幻想である。それは、山々が確固としてあるようには、ないからだ。それは、消え(disappear)、漂い(drift) ただ現在(now)のうちにあるにすぎない。すなわち、二律背反としての世界に、ひとは投げ出されている。

今
のあ
いまに
消えゆく
山々が漂い
敬虔に鳴りわ
たる鐘がこのう
えない甘美さで?
わたしたちもあ
なたたちも?
わたしも?
それゆえ
しよう
よキ
ス

rainsweet

s

tillnes

s

&

farnearf

uling

a thrush

's

v

oi

c

e

(from *Late Poems* IV)

1・3・1・3・1・3・1行という連構成に相称 (symmetry) がある。また、3行連においては、第2連に1・7・1字、第4連に8・5・8字、第6連に1・2・1字、という相称が見て取れる。1行目の r と t の強い響きの音で引き締められたあと、第2連の3つの s が三角形の角を占めていて、静寂が無声音によって閉じられる。また、第4連1行目 farnearf では対照的に、浮遊するような f の摩擦音によって包まれる。この清楚な響きのなかにカミングズの詩群に頻出するキーワードが現われてくる rain(雨) 静寂(stillness)

ツグミ (thrush)

雨
の甘
妙

し
ずけ
さ

と

遠
く近
く

ツ
グミの
声

風のない雨が静寂のうちに降っていて、姿の見えないツグミが遠くあるいは近くで十全に歌を奏でている。最後の音まできっちりと声は世界に拾われていることが、最終連における e の存在によって押し量られる。世界は、これほどにも長閑だ。静寂の世界にあってこそ認められうる音が、ここにある。言い換えれば、静寂にあってこそ、世界は創成される。

満ちていることを表す ful と進行中であることを表す ing によって構成される *farnearfuling* という造語は、世界が広がりをもって現われていることを示している。世界はそれ自体が神秘である。雨、静寂、そしてツグミがそこにあることが、神秘そのものであるからだ。変容しうる相へと揺れ動き、常なるものは何ひとつなく、ものみなすべてがいまここを超えてゆく。

1

un
der fog
's
touch

slo

ings
fin
gering
s

wli

whichs
turn
in
to whos

est

people
be
come
un

(from *New Poems*)

4・1・4・1・4・1・4行という連構成に相称がある。奇数連には偶数連より2字分余白があり、それゆえ偶数連が浮き出て見える。それらは3字で統一されており、繋げると slowliest（最も遅く）という slowly の最上級が見えてくる。

結尾の un から冒頭の un へと、世界は巡る。偶数連における s の多用は *Late Poems* IV 7 に見られた手法に近く、動名詞（touching, fingering）や関係代名詞あるいは疑問詞と見なされる語（which, who）にまで s は付けられ、引き締まる音の世界を奏でている。それだけではない。s は fog（霧）が象徴する曖昧模糊とした世界に静寂の切っ先を入れると同時に、光を投げかけるアルファベットとして散りばめられているように思われる。すなわち、un という否定の接頭辞とみなされる2字に包まれた世界に連結するもの　おそらくは sun（太陽）として。

否定の接頭辞にさらに s というアルファベットが接頭されることによって、太陽が現れ出る。世界は創成される界であることを、この詩篇が明かしている。太陽は未だ現れない。しかしながら、創成しようという原初にある意志にこそ、太陽という象徴性が潜んでいる。

霧の
接触
のもと

ゆっ

手触り
の
もと

くり

何も

のか
へと

と

ひとは
変容
し

世界はゆっくりと進んでいる。霧がそうであるように、形成され形成されゆく過程にあるものとして、世界はある。ひともまた、ゆったりとした時間の波を漕いで、何者かであろう (be) とし、何者かになるう (become) として、やって来る (come)。つねにいまここを捨て去り、つねに未知なるものへと変容しつづける、ひとの志向性が発露する磁場へと太陽は昇るだろう。

太陽は次の詩篇にも見て取れる。

14

a great

man

is

gone.

Tall as the truth

was who:and

wore his(mountains

understand

how)life

like a(now

with

one sweet sun

in it,now with a

million

flaming billion kinds

of nameless

silence)sky;

(from 73 Poems)

1・3・1・3・1・3・1・3・1 行という連構成に相称がある。冒頭の第1・2連 a great man is gone. (偉大な男が逝った)は、珍しくもきちんと文が生成されており、きっちりとピリオド(。)で閉じられてもいる。ただひとつの大文字で始まる次の第3連 Tall as the truth (真理のように気高い)は、ひときわ目に入るだけでなく、Tall とtruth が頭韻を踏んでいてtの乾いた音が世界にこだまする。しかしながら、次の第4連から世界は未知の領域へとふたたび漂う。

偉大な

男

が

逝った

真理のように気高い

誰だった彼は
(山々は
知っている

夕焼け

の壮大な
パノラマ
のように

彼の人生は

フラッシュバック
され) ときに
太陽とともに

ときに

何百万もの燃えさかる
何十億もの
名もない炎の

沈黙とともに

気高い男は天空へと屹立している。sun (太陽) は、この男の人生に添えられた形象であり、何百万何十億もの燃え盛る炎の沈黙として表わされている。夕焼けのような壮大な天空のパノラマのうちに人生が表象されている。この詩篇は、亡くなった男への哀歌であると同時に、空の沈黙へと同化する詩人の内省である。

太陽はまた、次の詩篇にも見て取れる。

1

!blac

k

agains

t

(whi)

te sky

?t

rees whic

h fr

om droppe

d

,

le

af

a::go

e

s wh

IrlI

n

(from 50 Poems)

これは相称の作品ではない。4・1・4・1・4・1・4・1行という連構成は、これが相称になるためには、冒頭に1行の連が結尾に4行の連が置かれなければならない。完結する世界ではなく、拡がりゆく世界へと、作品は志向しているように思われる。つまり、4行+1行という群が反復されることにより、詩篇はもう一度繰り返される予感のうちにある。たとえば、次には葉がもう一枚落ちるといったように。

感嘆符、疑問符、コンマ、コロンの、セミコロン、ピリオド (!? , ; .) を取り除き、大文字を小文字に換え、通常の統語法をあてはめるならば、次のような語列が浮かび上がってくる。

black against (whi)te sky trees which from
dropped leaf a goes whirling

白い雲
黒い木々

ぐるぐる

廻りながら
落ちて

行く

世界は
ひと葉前の

こと

一つの行において独立した語と目されるのは、sky と ago のみである。ago は a leaf と goes の語へと分かれゆくものであるとしても、「～前」という副詞としての語義は潜在している。葉が木から別れるように、語もまた別れゆく！

世界は、感嘆符から疑問符へ、コンマからコロンのセミコロン、そしてピリオドへと辿り着く (! ? , ; .)。一枚の葉が落ちるように、世界は開始され終了する過程のなかに創成される。木の葉が物語るように、世界は一枚の葉の歴史に凝縮する。木々が白い雲を背に黒く見えるほど、太陽は眩しく輝いているにちがいない。

第7連の第3行に現れる IrH の屹立するアルファベットは、聳える木々の姿を表象している。ふたつの I という i の大文字化は視覚という要請による。太陽は語としては現れていないが、スケッチされた詩篇の中心部分に皆既月食のようにきっちりと投影されている。

次の詩篇には、太陽は具体的な物象のひとつとして現れている。

10

little man
(in a hurry
full of an
important worry)
halt stop forget relax

wait

(little child
who have tried
who have failed
who have cried)
lie bravely down

sleep

big rain

big snow

big sun

big moon

(enter

us)

(from *No Thanks*)

前述の詩篇と同様に、5・1・5・1・5・1行という連構成は、これが相称になるためには、冒頭に1行の連か結尾に5行の連が置かれなければならない。つまり、完結し閉ざされた空間を保持するのではなく、むしろ、次の相へと作品が向かっている。相称詩が形象のうちへと内化されるのではなく、ここでは想念の自由なる飛翔が期待されている。

who have ~の3回における繰り返しや big ~による4回の繰り返しは、頭韻の効果を表しており、hurry—worry、child—tried—criedの脚韻もしっかりと踏まれている。押韻による音響世界は次の相へと響きわたっている。つまり、詩篇が書かれたあとに想念が拡がりうる予感、すなわち展開されうる世界の予感に満ちている。

man（ひと）及び child（子供）は、rain（雨）、snow（雪）、sun（太陽）、moon（月）とともに、この詩篇に現れる普通名詞である。しかしながら、太陽と月はこの世界にたったひとつのものとしてあり、雨と雪もまたこの宇宙には固有の物象であり、人は子供とともにこの世における時間的存在の固有の生命として描かれている。

（心配事をたいせつに
かかえ急いでいる）

ひとよ

歩みを止め 手を休め

ものを忘れ 力を抜き

待ちなさい

(やってみたし

しくじったし

泣いてきた

幼い子よ)

平然と横になりなさい

目をつむれば

おおきな雨

おおきな雪

おおきな太陽

おおきな月が

(こころのなかへ

入ってくる

内省の豊かさが、世界の豊かさである。散りばめられた数々の動詞の原形は、どれもが主語を欠いており、したがって命令文の述語動詞のようにも考えられる。ひとは子供から大人へと成長する。しかしながら、ひとはもはや子供には帰れない。子供はこころのなかに内包されている。little man (普通のひと) への呼びかけは、したがって、子供時代を生きなおかつ子供ごころを抱えたひとへの、慰藉に似たメッセージである。

動詞はいずれもが、動作及び行為の中断を促している。急ぐことによっては、世界は立ち現れない。内省は外的な活動とは反対の内的な活動であり、世界は

静寂（stillness）のうちに創成されるはずのものであるからだ。
次の詩篇には、またもや太陽は象徴性として現れている。

54

timeless

ly this

(merely and whose

not

numerable leaves are

fall

i

ng)he

Stands

lift

ing against the

shrieking

sky such one

ness as

con

founds

all itcreating winds

(from 73 Poems)

1・3・1・3・1・3・1・3・1行という連構成に相称がある。ただ一ヶ所に大文字が現われる中央の第5連に目が集中する。Sによって語が挟まれるのは、上述の2つの詩篇に共通している。ここではstands という語がsによって両脇から引き締められ、立脚する何ものかのありようが強調されている。静寂がtimelessly（永久に）という語によって表わされ、世界は進行するものであることが木の葉が落ちるありようによって示されている。heは唯一であるもの（oneness）を仄めかし、この詩篇においても空に君臨する太陽を表している。風が舞うように、世界は生成される。その世界に、無数の葉が舞い降りる。

永遠のように

この

ただ

数えきれない

葉たちの

舞い

降りる

なか

立ち尽くし

泣き叫ぶ空に

対抗して

高揚する

ただひとつである

ものとして

生成する

すべての風

をおおい包んで

風は強く葉が激しく振り落とされる世界にあって、太陽はその確かな存在で空へと立ちすくんでいる。ざわめく木の葉も枝もまた、太陽が見守っている。風と葉の物語は紡がれるだろう。それは未踏の世界を生成していこう。次に置かれた小篇もまた、創成される世界の神秘へと触れている。

55

i

never

guessed any

thing(even a

universe)might be

so not quite believab

ly smallest as perfect this

(almost invisible where of a there of a)here of a

rubythroat's home with its still

ness which really's herself

(and to think that she's

warming three worlds)

who's ama

zingly

Eye

(from 73 Poems)

円錐形の構成にあって、中央の 8 行目だけが突出し、最後の行の Eye が最初の i へと同音として回帰する。Eye だけが大きい文字であるゆえに、眼がこの詩篇の中心語であるように思われる。

静寂 (stillness) が世界を包み、宇宙 (universe) は極小のもののなかに内在している。

推
測し
なかつ
たどれも
(宇宙でさ
え) 信じられ
ないほど小さく
はなく完全でルビ
ーの喉もとに見えな
いそこから静け
さをともないほん
とうに自分自身
で三つの世界
を暖めてい
ると考え
る驚く
べき
眼

宇宙は極小のものにさえ存在する。「私」が見る存在であるとき、見られる対象にはつねに世界が模索されている。「私」は「眼」であり、静寂のうちにある内省が宇宙を構築してゆく。宇宙のなかにひとが存在しているのではない。

ひとの抱きうる志向性にこそ宇宙は立ち現れる。言語はこうして、世界を生成し、ひとつひとつの小宇宙として、惑星のように散りばめられている。

[原文の詩篇と訳文について]

本論に提示された作品は、*E.E.CUMMINGS COMPLETE POEMS 1904-1962* Edited by George J. Firmage, Liveright, 1991 より引用。日本語への訳出はすべて筆者による。

[注]

- (1) 門脇道雄「美、あるいは規範からの飛翔 詩人E.E.カミングズの言語世界」
『東北公益文科大学総合研究論集第10号』東北公益文科大学、2006年。
pp.45-46

[参考文献]

E.E.CUMMINGS COMPLETE POEMS 1904-1962 Edited by George J. Firmage, Liveright, 1991
藤富保男編『カミングズ詩集』思潮社、1997年。